

氏名	伊藤 さとみ
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第 258 号
学位授与の日付	平成 16 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	現代中国語にみられる単数／複数／質料の概念

論文調査委員 (主査) 教授 東郷 雄二 教授 山梨 正明 教授 大木 充

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、現代中国語に見られる単数・複数・質量の概念を、従来の名詞の枠を越えて形容詞・動詞・文レベルにまで拡張し、形式意味論に基づく理論的分析を行ない、レベルの異なる言語現象に対して統一的説明を与えようと試みたものである。本論文の構成と内容は以下の通りである。

第一章では、まず束理論 (lattice theory) に依拠し、単数・複数・質量の概念を集合論的に規定した。単数とは原子からなる集合、質料とは原子の集合からなる集合と見なすことで、質料の持つ累積性 (x が A に属し、 y も A に属するとき、 $\{x, y\}$ も A に属する) と均一性 (x が A に属するとき、 x のどの下位部分も A に属する) というふたつの特性を表現することができる。また複数とは、質料的領域から原子を引いたものと考えることができる。この分析に基づいて、中国語においては質料的領域が基本であり、限定詞の付かない裸名詞は質料を表すと仮定する。さらに、中国語の限定詞である量詞が、形態論的に名詞を修飾すると単数の領域が得られ、語彙的に名詞を修飾すると複数の領域が得られるとの仮説を提案した。

第二章と第三章では、それぞれ中国語の名詞と名詞句の問題を考察している。

第二章では量詞や修飾語を持たない裸名詞を取り上げ、裸名詞に認められる類名・定・不定・総称・非指示の 5 つの解釈の派生を分析した。このうち類名解釈は、中国語の裸名詞は質料的領域を外延として持ち、かつ類名が質料的領域で表されることから直接に導くことができる。残りの 4 つの解釈のいずれになるかは、多様な要因に支配されるが、なかでも文の表す出来事の一回性と、名詞が出現する文中の統語的位置が大きな役割を果たす。本論文では、質料的領域から状況を含んだ形で個体の集合を取り出す派生を仮定することで、文脈が名詞の意味解釈に与える影響を統一的に説明できることを示した。

第三章では、数量詞を伴う名詞句を考察し、量詞の働きを、質料的領域から個体の集合を取り出す操作と規定した。このような量詞の働きによって取り出された個体集合は、状況項を含まないので状況依存的ではない。この点が状況依存的量化を行なうことができる裸名詞との大きな相違であり、このように規定することにより、裸名詞と数量詞を伴う名詞句の分布上の違いを説明できることを示した。

第四章以下においては、従来名詞についてのみ考えられてきた可算・非可算の区別を、名詞以外の領域に拡張して考察を行なっている。

まず第四章では形容詞を取り上げ、中国語で異なる振る舞いを示すことが知られている性質形容詞と状態形容詞の違いを分析した。性質形容詞を個体から程度インターバルへの関数、状態形容詞を個体から真理値への関数と仮定することで、両者の違いを説明することができる。このように規定すると、性質形容詞はインターバルの集合、即ち質料的領域を表し、状態形容詞は個体の集合、即ち可算的領域を表すことになるので、性質形容詞と状態形容詞の区別は裸名詞と数量詞を伴う名詞句の区別に対応することがわかる。

次に第五章では動詞を取り上げ、補語なしの裸の動詞と補語を伴う動詞の振る舞いの違いを分析した。裸の動詞は時間イ

ンターバルについて真理値を決定し、補語を伴う動詞は時間点について真理値をはかると見なすことで、両者の振る舞いの違いを説明することができる。インターバルは質料的構造を持つので、裸の動詞は質料的特性を持つと考えられ、一方補語付きの動詞は時間軸上の点を基本とすることから可算的特性を示す。このように動詞のカテゴリーについても、裸名詞と数量詞付き名詞句の区別に対応する特性を認めることができる。

第六章では中国語学でよく論じられてきた文終止の問題を取り上げた。文終止とは、文に主語と述語があっても完全な文とはならず、副詞・アスペクト・モーダル要素などの助けを借りて完全な陳述文となる現象をいう。本章では、中国語における単純主述構造は命題しか表さず、それとは別に可能世界と時間インターバルの指定を必要とするという仮説を提案した。これまでに観察されてきた文終止成分は、いずれも可能世界と時間インターバルのペアを束縛すると分析することにより統一的に理解できるばかりか、「明日」「昨日」のようにともに時間を表す成分であっても、可能世界を考慮するか否かにより文終止の働きが異なることも、うまく説明できることを示した。

このように本論文では、本来は名詞についてのみ考えられてきた単数・複数・質料という概念を形式意味論的に規定し、形容詞・動詞・文の領域にも拡張して適用することにより、異なるレベルに属する中国語の言語現象を統一的に説明することができるという提案を行なった。

論文審査の結果の要旨

現在の言語研究は、形態論・統語論の分野から意味論の分野に深く踏み込むようになり、文の意味解釈に重要な役割を演じる名詞句の意味解釈の問題は、注目を集めるテーマである。本学位申請論文は、従来は名詞について論じられてきた可算・非可算の区別と、その系としての単数・複数・質料の概念を、名詞を超えて形容詞・動詞さらには文レベルにまで拡張し、その有効性を示すとともに、異なるレベルに属するさまざまな言語現象を統一的に説明することができるという仮説を提案し、現代中国語についてその仮説の適用を詳細に検討したものである。

第一章は本論文の前提となる理論的考察で、名詞の単数・複数・質料の概念の基礎となる理論を論じた部分である。申請者が依拠しているのは、Krifkaから現代の形式意味論研究者が提案した束理論に基づく集合論的分析である。現在の形式意味論においてこの束理論は広く用いられており、申請者はそれを中国語の名詞の内部構造に適用し、中国語の名詞は質料的領域を基本とするという提案を行なっている。中国語における限定詞が名詞を語彙的に修飾すると複数の領域を得、名詞を形態論的に修飾すると単数の領域を得るという分析は、単数を基本形式とする従来の分析とは異なり、独創性が認められる。

第二章では、中国語の数量表現や修飾語を伴わない裸名詞が取り上げられている。中国語の裸名詞は質料的領域を表し、類名を表すというここで提案された分析には、質料的領域という概念のより一層の精密化が必要かと思われる。中国語の裸名詞に認められる定・不定・総称・非指示という他の解釈に関して、申請者は「状況」という概念を導入し、文の表す出来事の一回性という特性を考慮することで、質料的領域から状況を含んだ形で個体集合を取り出す派生によって説明しようと試みている。ただ、定・不定の解釈の区別について、申請者は「文の主題」という談話文法的概念を援用しており、この概念と形式意味論との接続は、今後の課題であろう。

第三章では、中国語における量詞を詳細に検討し、数量表現を伴う名詞句について、量詞の働きを質料的領域から状況項を含まない個体集合を取り出すと規定している。このような提案をすることで、第二章で検討した数量表現を伴わない裸名詞との、文中における分布上の違いや可能な意味解釈の違いを統一的に説明することに成功しており、これは本論文の大きな成果と考えることができる。

第四章以降においては、名詞の領域を離れて、従来は可算・非可算の概念とは無縁と考えられてきた形容詞や動詞を対象として、第三章までで展開してきた仮説を適用しようと試みており、第四章以下は本論文のなかでは野心的な部分で、特に申請者の考察の独自性が展開された部分と言えよう。

第四章では「高」「白」のように単純な構造を持つ性質形容詞と、「高高」「雪白」のように複雑な構造を持つ状態形容詞の振る舞いの違いを、性質形容詞は個体から程度インターバルへの関数、状態形容詞は個体から真理値への関数と定義することによって説明しようと試みている。この分析で特に興味深いのは、このように規定することにより、性質形容詞が表すのは質料的領域で、状態形容詞は可算的領域であると考えことができ、第三章までで考察してきた名詞についての、質料

／可算という区別との平行性を捉えることが可能になるという点である。

第五章では動詞を対象として、補語なしの裸の動詞は時間インターバルについて真理値を決定し、補語付きの動詞は時間軸上の点について真理値を決定するという仮説を提案している。また、第六章では文終止の問題を取り上げ、中国語の単純主述構造は単なる命題しか表さず、それとは別に可能世界と時間インターバルのペアの指定が必要だとする分析を提案している。これらの分析を通じて明らかにされたのは、中国語における補語なしの裸の動詞は質料的領域に対応し、補語付きの動詞は可算的領域に対応するという、名詞の構造との平行性である。

本論文ではこのように名詞に関する可算・非可算の区別が、名詞以外の形容詞・動詞・文についても有効であることを実証しており、意味論研究にとって大きな意義を持つ論文である。以上の点で、本論文は人間の認知活動と環境の関係を考察する人間・環境学専攻環境情報認知論講座の理念に適ったものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年7月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。